

幼稚園教員の専門性としての共感

—— エマ・マーウェデルの保育と幼稚園教員養成の実際をてがかりに ——

橋 川 喜美代

(キーワード：共感性, エマ・マーウェデル, ケート・W・ウィギン, エリザベス・ピーボディ)

はじめに

平成20年3月、幼稚園教育要領の改訂に先立ち、「幼稚園における学校評価ガイドライン」が作成された。幼稚園において、「幼児がより良い教育活動を享受できるよう、学校運営の改善と発展を目指し、教育の水準の保証と向上を図る」¹⁾ことは重要である。しかし、幼稚園の学校評価が、幼児にとってより良い教育の保証と向上に繋がるかどうかは、その目指すべき「教育」を抜きに語ることは危険である。佐伯胖は、「互いを『不信感』のまなざしをもって警戒し合い、牽制し合い、スキがあればつけ込み、出し抜こう」とする競争原理に立脚した現代の教育が求める、幼児にとってのより良い教育そのものを問題視する。そして、人間性の発達を「共感的かわり」を軸として考え直し、「本来、人が『知る』ということ、『行為する』ということの根底には、『共感』があるはずですし、そこから出発すれば、『学ぶ意欲』も、『する意欲』もわき起こってくる」と述べ、共感性を取り戻す試みがより良い教育を保証するために為されるべきだと強調している²⁾。

ところで、子ども、幼稚園教員、保護者が育ち合う中で、互いの共感性が見い出された保育実践としてあげられるのが1878年、カリフォルニア州サンフランシスコに開設された無償幼稚園、シルバー・ストリートの指導者、ウィギン (Wiggin, K.D.) による保育である³⁾。

アメリカの幼稚園運動は1856年、ドイツ人移民のマーガレット・シュルツ (Schurz, M.) がウイスコンシン州ウォータータウンに開設したドイツ語幼稚園に端を発している。これは、フレーベル直伝の幼稚園理論と実践に基づき、子どもたちにドイツ人としての国民性を伝えるための小さな園であった⁴⁾。1859年、ボストンで開催された集会において、シュルツと娘アガテはピーボディ (Peabody, E.) に出会った⁵⁾。アガテの子どもらしい育ちに共感したピーボディは、その旺盛な精力をもってフレーベルの教育哲学を学び、幼稚園運動に残りの人生を捧げる決心をした。アガテを含む3人の出会いが、ドイツ移民の居住地に限られていたドイツ語幼稚園をアメリカに根付かせる契機となったのである。

1860年、ピーボディはボストンに英語幼稚園を開設した。1870年代までに、幼稚園は10園程度で、英語幼稚園はわずかに1園にすぎなかった。ところが1867年、ピーボディはヨーロッパ歴訪の旅に出た。理由は次のピーボディの言葉が示すように、教育的運営の行き詰まりにあった。「最も著名な幼稚園は、ボストンにおける私自身の幼稚園である。しかし、私はフレーベルの教育方法から必然的に約束された結果が生み出せず、彼が批判しているような結論に陥ることによって、園の根本的欠陥を認めざるを得ない。財政的成功や、かわいい遊戯学校での子どもたちや、親たちの喜びに惑わされて、根本的な欠陥を見逃すことはするまい」という思いを抱いて、真なる幼稚園を探し求める旅に出た。そして翌68年、「自らの誤りやそれに類似したすべての誤りを捨て去り、真なるものを確立」するという決意を新たに帰国した⁶⁾。

彼女のヨーロッパ歴訪には、ドイツ人幼稚園指導者の招聘という目的があった。ピーボディは、真なる幼稚園を確立する基礎が、幼稚園教員の養成にあると考えていた。この招聘に応じたのが、マリア・ベルテ (後のクラウス=ベルテ Krause-Boelte, M.)、マチルダ・クリーゲ (Kriege, M.) と娘アルマ、エマ・マーウェデルたちである。アメリカに政治的自由を求めてきたシュルツらにとって、幼稚園は自国の文化を伝承する唯一の手段であったが、ベルテらドイツ人幼稚園教員たちが遭遇したのは、ドイツ文化の色濃い幼稚園を嫌い、子どもたちを通わせることに抵抗する親たちへの対応であった。幼稚園受容の道を切り開いたのは、キャサリン・ビーチャー (Beecher, C.) ら女子教育の先覚者や、1876年のフィラデルフィアで開催された万国博覧会における幼稚園の実演による大々的な宣伝であった。さらに、1870年代からの移民の流入に伴う大都市の貧児の救済が、大きな社会問題となり、幼稚園はこの救済事業としての役割を期待されたのである。幼稚園は貧困・犯罪・衛生といった

都市問題の万能薬のごとく宣伝され、各地に発展していく。それを支えたのが1878年、ウィギンによる貧児への共感的保育と保護者支援の成功であった。彼女に共感的保育と保護者支援の理念と実践を伝授したのが、マーウェデル (Emma Jacobina Christiana Marwedel) である。

ハンブルグの女性産業学校 (Garl's Industrial School) の校長であったマーウェデルは、幼稚園の真髄を学ぼうと渡独したビーボディに見出され、アメリカに移住した。マーウェデルのドイツ、アメリカでの生活は栄光よりも、苦難の連続であった。スウィフト (Swift, F. H.) が「マーウェデルのアメリカ幼稚園運動と進歩主義教育に及ぼした成功と貢献は、実利的な達成の観点ではなく、彼女が他者に与えた靈感やガイダンスの観点から計られるべきである。」⁷⁾ という指摘は、非常に的を射たものと考えられる。

マーウェデルは1893年11月17日、サンフランシスコのドイツ人病院において、76歳の生涯を閉じる間際まで、フレーベル (Froebel, F. W. A.) 教育哲学の福音を広めようと、その構想を練っていたという。彼女は見舞いに訪れた幼稚園教員たちに、「幼稚園に忠実であり、フレーベルの実体をもって彼を説明するよう努力しなさい。私は幼稚園教員には世界を改革する力があると確信しているのだから」と、その役割を価値づけ、激励したのである⁸⁾。彼女が葬られたカリフォルニア州オークランドのマウンテン・ビュー墓地の石碑には、「太平洋海岸の開拓的幼稚園教員、フレーベルの忠実な伝道者」⁹⁾と刻まれている。彼女のドイツからアメリカ、そして東海岸から西海岸への旅は、フレーベルの忠実な伝道者が果たしたまさに開拓伝道の旅であった。

本研究は、マーウェデルがアメリカ人幼稚園教員に広めようとしたフレーベルの福音とも言うべき子どもへの共感性をウィギンによる自伝、*My Garden of Memory* から探り出すことを目的とする。マーウェデルのカリフォルニア・モデル幼稚園と太平洋モデル幼稚園教員養成校での実践記録を基に、教師と子どもの「共感的かわり」を分析し、わが国に求められる幼稚園教員の専門性としての共感を明らかにする。

I. マーウェデル伝道の旅路

ドイツでは1848年革命の時期を中心に、第1次女性解放運動が展開され、男性知識人の女性論にも大きな影響をもたらした。そして、1860年代には女性性に男性性と対等の価値を認め、その影響力を家庭内のみならず広く社会に発揮させていこうとする試みが、ヘンリエッテ・シュラーダー＝ブライマン (Schradler-Breyman, Henriette) ら幼稚園運動家によって開始されていく¹⁰⁾。

シュラーダーは「わが子の出産と育児という『身体的母性』と区別して『精神的母性』と表現し、母性的資質の発揮という課題は男性には代替不可能なものであり、女性特有の活動分野が社会のなかに存在すると主張し」、教員などの職種に女性が進出する足掛かりを求めた。この「精神的母性」論は女性運動の精神と文化を象徴する概念として確立されていく¹¹⁾。

マーウェデルのドイツでの教員生活は、こうした女性解放運動が激しく展開する中で確立されていく。彼女の生い立ちやドイツでの教員生活を同時期に活躍したクラウス＝ベルテらと比較しながら明らかにしておこう。

1. 女性解放のリーダーから幼稚園の伝道者へ

スウィフトのよれば、マーウェデルの生誕年は、1817年、1818年、1819年という3つの説があった。また、彼女がロサンゼルス、パークレー、オークランド、サンフランシスコに開設した養成学校の年月日も、伝記を書いた作家によって異なる。最も不可解なのが、幼稚園教員としての訓練をフレーベルから受けたのか、未亡人ルイーゼ・フレーベル (Froebel, L.) から受けたのか、それとも独学なのか、わからないという点である。彼女がドイツでの生活を余り友人たちに語ろうとしなかったとはいえ、謎に包まれた人物である¹²⁾。

さて、スウィフトはこうした諸説に一つ一つ解答を与えていく。まず、生誕年では、彼女が幼児洗礼を受けた教会記録から、1818年2月27日、ゲッチンゲンからそう遠くないハノーバー州のミュンデンに生まれたことを明らかにしている。そして、ハインリッヒ・L・マーウェデル (Marwedel, Heinrich Ludwig) とジャコビナ・C・C・M・マーウェデル (Marwedel, Jacobina Carolina Christiana Maria) の5人きょうだいの第1子であったと推察している。父親は地方判事補であり、記録に記された彼の名前の上に、英語の「キャプテン (大尉)」の肩書きが付いていることから英国陸軍に従事し、大尉の地位まで昇進した人物であったのではないかと推測する。彼女は幼い頃に母親を亡くし、家事や弟妹の世話を担う役割を期待されたという。しかも、地方判事補の娘が働きに出るといふ重大な意味も分からぬ内に、父が亡くなるという不幸に見舞われた¹³⁾。

19世紀前半、「市民層の主婦にとって金銭を得るための労働に従事することはタブー視されていたし、また市

民層の女性にふさわしい職業など存在していなかった¹⁴⁾。」事実を考え合わせるなら、一家の大黒柱として働くことがいかに難しく大変であったかが理解できよう。しかも当時、市民層の女子教育では「敬虔で従順な妻と優美な淑女の養成を主眼とし、教科としては宗教、フランス語、音楽、手芸、針仕事などが重視された。また、女性は家庭においても四六時中手を動かして手芸や針仕事にいそまなければならなかった。このような作業を通じて、女性の徳性とされた勤勉、忍耐、自己犠牲などの精神に磨きがかかることが期待され」ても、子どもを一人前の人間に育て上げる知性や人格面での教育は期待されていなかったのである¹⁵⁾。

マーウェデルの共感と同情は、ドイツで働く女性が搾取される悲惨な状況に向けられた。そして、彼女はその原因が女子教育の遅れにあると考えた。低賃金で働かされる女性の解放を求めるマーウェデルは、英国、ベルギー、フランスに旅しながら、1年間をかけて、経済学、働く女性の社会的地位、地位向上を提供するための施設について研究した。帰国後、彼女はその成果を『なぜ、私たちは女性産業学校が必要なのか。いかにそれらを確立するのか』と題する小冊子にして発行した。この小冊子はドイツだけでなく、外国においても大きな関心を呼び起こした。終生、働く女性の問題を追及し続けたマーウェデルは、その解決の鍵がフレーベルの教育哲学と実践を幼稚園を越えて適用することに見出した。子ども時代の解放、母性の完成や人類の再生が、幼稚園を通して成し遂げられると捉えていたのである¹⁶⁾。

ところで、マーウェデルは誰から幼稚園教員としての訓練を受けたのだろうか。スウィフトはルイーゼ・フレーベルがハンブルグで幼稚園教員の指導を10数年続けていた実績から、マーウェデルを指導したのはルイーゼだと判断している¹⁷⁾。とはいえ、英国、ベルギー、フランスでの女性産業学校の見学をもとに、マーウェデルがドイツの女子教育改善の明確な計画を練り上げた実績から見て、独学でフレーベルの著作を読み耽って思索する広い教養を身につけていたとも言えよう。

1864年、ライプチヒにおいて公教育促進組織の指導者委員会のメンバーとなったマーウェデルは翌65年、女性地位向上組織のメンバーに選ばれた¹⁸⁾。そして1867年、ハンブルグに開設されたばかりの女性産業学校の校長となった。わずか1年間の任期であったが、この学校のカリキュラムは、「ドイツ語、歴史作文、計算、簿記、自然科学、自由画、模写、裁縫、機械（ミシン）縫い、洋裁、体操」であった¹⁹⁾。

マーウェデルの人生はピーボディがハンブルグを訪れたことによって、大きく変えられていく。マーウェデルのアメリカでの生活は表1のようにまとめられる。その生活場所は1年ごとに移動しており、安定性を欠いている。1870年、来米したマーウェデルは、ロングアイランドのブレンウッドに女子産業学校を設立した。この学校は女性を花屋、果物や野菜の生産者などに育てることを目的としていた。1株5ドルの売上金による協同資金で運営された学校は、提携した不動産会社の倒産でわずか1年で閉鎖。翌71年、マーウェデルはワシントンに移り、同様の学校を設立している。71年から75年までの間、マーウェデルが運営した私立学校はフレーベルの教育哲学を実践的に応用したものであり、工作学校、あるいは実践自然文化学校と呼ばれた。この学校において、彼女は

表1 アメリカにおけるマーウェデルの幼稚園伝道運動

西暦(年)	年齢(歳)	事 項
1870	52	ロングアイランドのブレンウッドに女子産業学校を設立。
1871	53	ワシントン D.C. において産業芸術学校設立。ここにドイツ語-英語幼稚園を附設した。
1872	54	実践自然文化学校設立。
1873	55	ワシントン D.C. の K 通り313番地において私立幼稚園と学校を運営。 3歳~12歳の50名が在籍し、5名の教師が雇われていた。
1874	56	ワシントン D.C. の18番通り800番地に実践自然文化学校移転。 6名のアシスタント教師を雇い、95名の3~18歳の生徒たちが在籍した。フレーベルの恩物を使用し、フレーベルの作業に加え、木工や厚紙細工などが実施された。
1876	58	ロサンゼルスに到着。カリフォルニア模範幼稚園と太平洋模範幼稚園教員養成所設立。3歳~8
(1877)	(59)	歳の子ども20名が在籍した。
1878	60	オークランドに移転。7番通り511番地に、模範幼稚園と養成校を設立。 サンフランシスコ公立幼稚園協会とシルバー・ストリート幼稚園の設立に貢献。
1879	61	幼稚園と養成校をオークランドからバークレーに移転した。
10. 8		バークレーにおいて、カリフォルニア幼稚園連合結成の会合を開いた。
1880	62	サンフランシスコのバンネス大通り1711番地に、太平洋幼稚園師範学校を開設。 ここに幼稚園と小学校を付設した。
1882	64	無償幼稚園と工芸学校を開設。
1886	68	模範幼稚園と師範学校の運営を断念。講演と執筆活動に専念。
1887	69	『自覚的母性』の執筆。

幼稚園や教員養成校だけでなく、初等学校や12歳から18歳といった上級クラスの生徒の教育も行っていた。ちなみに、1872年に設立した実践文化学校の生徒の中には、後にアメリカ大統領となるガーフィールド下院議員の3人の子どもたちが含まれていた²⁰⁾。

1874年のアメリカ教育局の『年報』によれば、場所を移転した施設は、ドイツ語-英語幼稚園を附設し、実践自然文化学校と呼ばれていた。ここには、6名のアシスタント教員が雇われ、95名の3～18歳の生徒が在籍している。幼稚園の保育時間は週5日、午前9時から午後1時まで。保育方法は恩物を用いたフレーベルメソッドで、調和的で自然な精神的、道徳的、工作的、身体的発達を目指す保育が行われていた²¹⁾。

1876年、彼女はロサンゼルスに移り、セバランス (Severance, C.M.) 夫人の支援を得て幼稚園及び幼稚園教員養成校を開いた。この養成校の生徒の一人が、ウィギンである。1879年、マーウェデルはカリフォルニア幼稚園連合 (California Kindergarten Union) を結成。また、彼女が1887年に出版した『自覚的母性』は、プレイヤーの『子どもの心』に記述されている観察記録に基づき、フレーベルの学説を児童期の発達に応用したものであり、幼稚園教員の間に発生的心理学に対する関心をめざめさせたといわれている²²⁾。

2. ドイツ人幼稚園指導者の来米と異文化との軋轢

ピーボディの招聘に応えたドイツ人幼稚園指導者は、マーウェデルだけではない。マチルダ・クリーゲやマリア・ベルテらが来米してきた。クリーゲはベルリンのマーレンホルツ＝ビューロー (Marenholtz-Bülow, B. M.) 夫人の幼稚園教員養成校で教育を受け、幼稚園教員として稼ぐため、1867年に娘アルマと共にニューヨークにやって来た。しかし、ドイツ人の幼稚園に対する偏見に遭遇し、園児が集まらず失敗。翌年、ピーボディの妹マンの要請で、ボストンにある彼女の幼稚園教員養成校の指導にあたった²³⁾。ボストンの母親たちは子どもを幼稚園に通わせることは嫌がったが、家庭で利用するために自らが幼稚園の方法を学び始めた。クリーゲが午後と夕刻に開講したフレーベルの理論と実践に関するコースに、20人のアメリカ人女性たちが通い始めた。

クリーゲに続いて、1872年に来米したのがベルテである。ピーボディは、ベルテにボストンの模範幼稚園と教員養成校の指導を任せるつもりでいた²⁴⁾。当時、ベルテは大きな影響力を持つ幼稚園指導者として知られていた。著名な法律家の娘であったベルテは、文化的に豊かな児童期を過ごしたが、18歳の時、進むべき道を踏み外しそうになった。この時、彼女を諫めたのが、ドイツの人気作家であり、フレーベル幼稚園の信奉者であった叔母、アミリー・ベルテ (Boelte, A.) であった。1854年、ベルテは両親の反対を押し切って、ルイーゼ・フレーベルが開いていた幼稚園教員養成プログラムを学ぶためにベルリンに移住。2年間のコースを修了した彼女は、イギリス初の幼稚園を設立したベルタ・ロンゲ (Ronge, B.) のもとでアシスタントとして働き、ロンゲ夫妻が帰独後、その幼稚園の指導を引き受けた。また1862年、ロンドンの万国博覧会には幼稚園教材などの展示に尽力し、その地位を確立。67年に帰独した。

ピーボディはアミリー・ベルテとの文通を重ねた後、1870年、ロンドンでベルテと始めて出会い、ジョン・クラウス (Kraus, J.) と共に、来米を求めた²⁵⁾。70年代のドイツでは、フレーベル主義幼稚園運動が隆盛を極め、幼稚園を教育施設として公認すると共に、貧民・労働者の子弟を対象とした民衆幼稚園の発展とそれを担う幼稚園教員の養成が活発になった。ベルリンでは、女性協会と民衆教育協会が並立し、フレーベル主義幼稚園運動をめぐる対立・競合が進む中、ベルテは新しい地、アメリカに渡る決意を固めた。1871年、ピーボディはベルテからの手紙を受け取り、来米の意志を喜ぶと共に、彼女の職場を探し始めた。

1872年、ピーボディはニューヨークのヘンリエッタ・B・ハynes (Haines, H.B.) 夫人の学校に、ベルテの職場を見つけた²⁶⁾。7年前のロンドン訪問で、幼稚園に興味を持ったハynes夫人は、自らの学校に幼稚園教員養成所と幼稚園を付設し、その指導者としてベルテを雇い入れた。この養成所の最初の生徒が、セントルイスの公立幼稚園の指導者、ブロー (Blow, S.) である。9月の幼稚園開園時の幼児数はわずか9名であったが、冬までに32名に増えた。しかし、ドイツ色の強い幼稚園の受容はなお難航を極めた。

ベルテらドイツ人幼稚園指導者たちは、アメリカ人の抵抗の中で、幼稚園を普及させる方法を模索し始めた。特に問題となったのが、象徴的で思索的な歌とゲームである。新しい考えに受容的ではあるが、騒々しいまでに活動的なアメリカの子どもたちは、ドイツの子どものように、自ら象徴的なゲームに没頭することはなかった。ベルテらは、歌やゲームをアメリカの社会・文化に応じて変える必要があると考えた。これに対し、ピーボディは、ドイツの歌やゲーム特有のゆったりしたメロディと思索的部分が、せかせかしたアメリカ人の生活に潤いを与え、児童期特有の神秘や予感を味わわせるとして重視した。しかし、ピーボディの考えは、幼稚園の問題がドイツのカリキュラムと方法にあると捉えるアメリカの親たちを説得できるものではなかった。

さて1873年、ベルテはジョン・クラウスと結婚し、2人でニューヨークに新しい幼稚園教員養成校を設立した。また、一時帰独し、1874年にアメリカに戻ったクリーゲらはベルテの後任として、ハインス夫人の幼稚園及び幼稚園教員養成校の指導を受け継いだ²⁷⁾。クリーゲとベルテは、養成課程に対する考えが大きく異なった。クリーゲは、幼稚園教員養成への関心を拡大するために、ドイツでの2年間の養成課程を7ヶ月に短縮した。週4回、午後に、恩物と作業の指導を行い、週2回、午前中に、幼稚園での実践と観察を課すことで、フレーベルの幼児教育の本質が学べると捉えていた²⁸⁾。

一方、ジョン・クラウスらドイツ人幼稚園指導者はクリーゲの26週間の短縮課程を批判し、クラウス＝ベルテは1年間の講義と同じく1年間の実践から養成課程を構成した。テスト期間である1年目は、指導者も生徒も、幼稚園の仕事に対する適性を評価するためのものであった。このコースの目的は、フレーベルが恩物や作業に込めた教育的なねらいや、子どもの自然な遊びが持つ深い意味を理解させ、形式的で機械的な教授法と化した職業に、教育的精神を吹き込むことにあった。生徒は幼稚園教員を観察し、徐々にその責務を学び取るが、2年目までは子どもの保育に直接関わることはできなかった。講義内容は、幼稚園の理論と技法に関わる講義、講読、時には、子どもの教育と教員養成が全く変わらない実践的プログラムもあった。問題はベルテが講義するフレーベルの『人間の教育』や他の教育学の小冊子に記載された内容に疑義や、質問を差し挟むことが許されなかったり、恩物と作業の体系的な研究と骨の折れる練習が課され、必要な機敏さや美的技能を獲得するために、何度も何度も単純な課題を繰り返すことが求められた点にある。長く厳しい養成は、形式的で機械的な恩物教授法に陥らせないための心的変容を準備し、霊感的着想を育む期間として課された。

こうした幼稚園教員養成の効果を実証したのが、女子教育の推進者であり、家政学の先覚者として著名なピーチャーであった。ピーチャーは、ドイツの幼稚園教育方法と厳格な養成の過程が家政学の学問的地位を復興させ、女性の役割を高めるものとして歓迎した。彼女はニューヨークに女子大学設立を企画したが、それは女性たちが家庭生活の実際的責務を修練し、さらに収入が得られる職業に就かせることを目的としていた。文学部、家政学部、保健学部、教育学部、美術学部、実業学部などが構想され、教育学部では、幼稚園、初等学校を付設し、女性教員の養成を行うことを目指すものであった²⁹⁾。

ドイツ人幼稚園指導者が設立した養成校から、後のアメリカの幼稚園運動を発展させていく著名な幼稚園教員が次々に輩出された。1873年、一時帰独したクリーゲの後任として、ボストンの幼稚園と養成学校を受け継いだのは、同校の生徒、メアリー・J・ガーランド (Garland, M. J.) である。1874年のアメリカ教育局の『年報』によれば、この幼稚園はクリーゲの教えに基づき、3～7歳の子どもたち24名が週5日、3時間の保育を受けていた。保育内容はフレーベルの恩物を用いた組立て、編物、縫物、描画、塑像、紙細工などであった³⁰⁾。

このガーランドの一門は、下図に示すように、1874年にシカゴで幼稚園教員養成校を設立し、進歩主義幼稚園運動家として活躍するパットナム (Putnam, A.) や、1876年の万国博覧会において幼稚園の実演を行ったバリット (Burritt, R.) といった大物幼稚園教員を輩出している。アメリカ独立百年を記念する万国博覧会の幼稚園展示場には、子どもたちの合唱や愛らしい光景に魅了された見学者がいつも群がっていた。数千の人が殺到し、長時間その場に留まって質問する様子は教育史上、画期的な出来事であった。バリットはフィラデルフィアに留まり、幼稚園と幼稚園養成校を設立したが、これは幼稚園をアメリカに受容させる試金石となった³¹⁾。

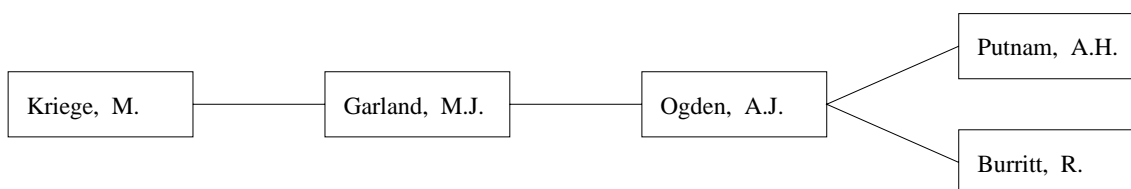


図1 ドイツ人幼稚園指導者が養成した著名な幼稚園教員

II. マーウェデルの幼稚園伝道活動

1876年³²⁾、マーウェデルは先にも触れたように、ボストンの女性クラブの母と呼ばれていたセベランスの支援を受け、ロサンゼルスに移り、カリフォルニア・モデル幼稚園と太平洋モデル養成学校を開設した。1876年初夏、セベランスは夫と2人の息子と共にロサンゼルスに移住した。その目的は、マーウェデルがワシントンから移り

住む準備を整えるためであった。幼稚園と教員養成の実験場所として選ばれたのは、サンタバーバラであった。マーウェデルはここで、ケート・スミス（後のウィギン）を含む3名の養成所生徒と4～7歳児25名の教育に乗り出したのである。

ウィギンの自伝を通して、マーウェデルの保育実践、幼稚園教員養成の目標と実際から、共感的保育の原点を明らかにしたい。

1. マーウェデルの保育実践の実際

マーウェデルの幼稚園における保育の流れは、ウィギンの説明によると、サークル・ゲーム→軽食→作業の順に進められた。ウィギンにとって、このサークル・ゲームは彼女に時間がたつのも忘れさせるほど、印象深いものとなった。新しい仲間や友だちと手を取り合い、輪になる“教師主導の遊び”（guided play）の中に、ウィギンは「文字化されたものではないが、確立された法則」を見抜いた。誰一人、輪を壊わしたり、自分の個人的な活動に無理矢理従わせようと急かすこともない。初め、やりたくなかったり、関心のない子は、側に座ったり、楽しそうに遊んでいる仲間を観察しているが、いつの間にか、輪に入って、心から楽しんで遊び始める。集団での楽しさや協同による心地よい盛り上がりや、自己中心性やわがままを少しずつ正していく³³⁾。

では、「小さな教師」というサークル・ゲームを紹介しながら、マーウェデルやウィギンらと子どもとの関係性を見ておこう。これは新しい仲間と手を取り合って輪になり、一人の子どもが中央に出て自由な動きをする間、「小さなハリー（子どもの名前）を見てごらん。私たちに何をするのか見せてくれるよ。小さなハリーを見てごらん。さあ次は、私たちが同じようにしましょう。」と手拍子に乗って歌いながら、輪の子どもたちも同じ動作をするという単純な遊びである。マーウェデルは歌の才能に恵まれていなかった。そこで、ウィギンが彼女に代わって、簡単な旋律に合わせて歌うと、子どもたちもわずか2分ほどで覚えた。ここで、マーウェデルは輪の中央に出て手本を示す「小さな教師」役を募ると、エドガーが名乗り出た。彼は居た場所から、素早く輪の中に入った。誰かに出し抜かれることなく、注目されたいエドガーの思いは成功した³⁴⁾。

エドガーの野心は達成できたが、彼はどんな動きをするかなど考えてもいなかった。そこで、マーウェデルが彼の側に行き、ヒントを与えた。4、5歳の少年は足を上げたり下げたり、腕をあちこち振り回すこと以外に思い浮かばず、この年齢の自己表現はとてもしずみカルであるとか、美的であるとは言い難いものであった。マーウェデルは腕を時計の振り子のように動かすようにアドバイスを与え、ウィギンら輪の子どももそれに倣った。それから、エドガーは次の教師をサークルの中から指名するように言われた時、「もう一方の腕で違う動きができる」と不満をもらした。

ゲームは子どもたちの喜びの内に進行し、バーサが教師に選ばれた時、ついに奇跡が起こった。バーサは頭も良く、演劇センスも備えていた。彼女は自分の白いスカートを両手で少し持ち上げ、幅一杯にまで広げて、曲の最初の小節で体をゆっくりとしずめ、完璧に膝を曲げてお辞儀をしながら、次の小節のところで体を起こした。この演出効果は魅力的かつ電撃的で、マーウェデルの涙を誘った。輪になっている私たちも急いでその動きに倣ってお辞儀をしたが、男児たちは足を突きだし、幾分男性的にやろうと試みた。また、女兒たちは両足をすり合わせ、さまざまな方法で頭を上げ下げするなど、鋭い胃痛を味わっているような格好であった。地面に倒れ込む子さえ出る始末で、英国宮廷にふさわしいお辞儀ができる者は誰一人としていなかった。

バーサの外観の優雅さに近づくには、私たちは余りにも不器用で、何度となく反復する必要があった。そして、私たちはゲームを終えるまでに、女性がお辞儀する時、仲間の若い男性たちが為すべきお辞儀の方法を教えることになった³⁵⁾。

ウィギンの記録は、最初に躍り出たエドガーと奇跡を起こしたバーサの際だった動きの違いを対比しながら、優雅なバーサの動きに近づこうとするために、お辞儀の仕方を学ぶきっかけとなったことを明記している。と同時に、ウィギンは「小さな教師」は単調な歌詞で、想像力を刺激するものではないと思ったが、見知らぬ子どもたちに集団の一員としての意識を喚起したり、ある共通した活動へと統一したり、リズムや時間の感覚を発達させる時に効果的な手段となることを発見した³⁶⁾。

このサークル・ゲームがウィギンの記憶に焼き付いたのは、2人の子ども、特にエドガーの心理を観察し、記録するよというマーウェデルの言葉があったからである。マーウェデルはこのゲームが終わった後、生徒たちに「バーサは私とまだたった2日しか一緒にいないというのに。子どもたちは常に発明工夫しています。あな

たがたはそれ(訳者：子どもたちの発明工夫)がどうやって働くのかわかるようになるでしょう。小さなエドガーに気がつきましたか。私はあなた方に観察力を育てて欲しいと思います。エドガーに関する簡単なメモが必要でしょう。」と語った³⁷⁾。

ゲーム後、子どもたちはクラッカーとミルクによる軽食を摂った。その中で、マーウェデルはさりげなくテーブル・マナーや会話のヒントを与え、続いて、30分間の粘土細工が始まった。この時間も、ウィギンはエドガーの記録を詳細に採取している。

音楽の時間にウィギンに与えられた榮譽は、ニンジンかカブを作るように求められた時、グループ最年少の子ども、エドガーに奪い取られた。エドガーが本物のような豚を作り、全員に認められたのである。エドガーは見事な豚を作り上げ、1時間ごとではないにしても、日ごとこうした仕事をしているのではと思う程、手慣れていた。鑑賞用に、私たちはもう1つ豚を作るよう頼んだ時、エドガーは家に帰りたと言った。歯が1本グラグラしていたのである³⁸⁾。

こうした粘土細工を観察したウィギンは、才能のある子は、材料の利用が整然とし、作品に仕上げていく手際もよいことを発見した。そうした力を持った子は、粘土の塊である種の形を作ろうとする4歳児を助けることができた。その一方で、余分な湿気で泥化した粘土を使いあぐね、塑像できない不器用な5歳児がいることも判明した。偉大な才能は、弱い者を助けるといった責務を与え、それが喜ぶべき榮譽となる。作業の中には、そうした高貴な理想が存在し、知らず知らずのうちに子どもの心の中に染みこんでいく。ウィギンはわずか数日で、幼稚園の仕事が苦行ではなく常に報酬であること、それを剥奪することこそが罰であることを確信した³⁹⁾。

12時、帽子が配られ、子どもたちは列に並んだ。エドガーはまるで偶然であるかのように列の先頭へと進み出した。驚きと喜びで泣き出さんばかりのマーウェデルが見守る中、子どもたちはウィギンの伴奏にのって行進しながら、降園していった。

ウィギンは25人の中で気になるエドガーの心理研究に没頭する。ウィギンは思いつくままに、エドガーの特徴をあげていく。エドガーは生まれついてからずっと、自分が主人公にならなかった作業などないはずである。彼はよく作業過程を怠るが、彼にとってそれらは知りつくしたことにすぎない。お話の中で出てくる動物は、実際に裏庭でペットにしたり、家畜にしている。彼は幼く、貧しい環境に置かれている。それにもかかわらず、彼が行かなかった国がないほど知り尽くしている。彼は協同すべき仕事に飽き飽きしているが、責任のある地位に置けば、彼も掃除をしたり、塵を払ったり、植物に水をやったり、訪問者のためにドアを開けたり、子どもたちの仕事用の封筒を集めたり、行進のラインを引いたりするだろう。しかし、どうすればエドガーの才能を発揮させることができるのだろうか？アメリカ大統領のクリスチャン・ネームや最高裁判所の判事の名前をすべて暗唱し、多くの人物を知っているウィギンにも、この答えはなかなか思い浮かばなかった⁴⁰⁾。

マーウェデルの幼稚園が、ウィギンの記録通りとするなら、図2に示すように、教師の教育的要求と子どもの活動要求が、バランスよい緊張状態にある間接的指導中心の保育が展開されている。サークル・ゲームも粘土細工も、教師がやるべき活動を提示するが、実践の場での子どもの活動・発達要求によって、それは柔軟に変更されていく。マーウェデルは、フレールルの遊びやゲームに固執することなく、発達を生み出す要求が共感的な子どもとのかわりから起ってくることを実践を通して教えようとした。子どもたちは、幼稚園で与えられる仕事によって、その才能をさらに開花する経験を与えられる。ウィギンはエドガーを観察・記録する中で、大人の枠組みで彼の才能の芽を摘むのではなく、伸ばす仕事をエドガーの身になって見つけようと悪戦苦闘した。そして、与えられるべき仕事とその方法は、教員養成校の卒業式の混乱の中で見出された。これについては、次節で触れたい。

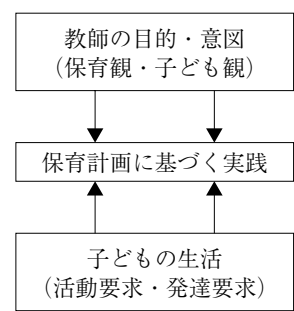


図2 間接的指導中心型保育

2. 幼稚園教員養成の目標と実際

では、教員養成校におけるマーウェデルの指導に話を移そう。ウィギンの記述によれば、養成期間は9ヶ月。授業料は100ドルで、本や教材のために25ドルが必要であった。初日の印象や講義科目、卒業式などの様子に触れる前に、ウィギン以外の2人の生徒について述べておこう。

ウィギンは仲間の2人を Miss H.と Miss S.というようにイニシャルで表している。マーウェデルの詳しい説

明によれば、Miss H.はメアリー・ホイット (Hoyt, M.)、Miss S.はネッティ・スチュワート (Stewart, N.) である⁴¹⁾。ウィギンはホイットとスチュワートの第一印象を次のように述べている⁴²⁾。「Miss H. は長い間、公立学校の教師を務め、疲れた女性であった。彼女の人生は努力の報いとなる喜びもなく、ただ教育のつまらない仕事で明け暮れたように思われた。Miss S.は私と同年くらいで、非常に経験に富んでいるが、平凡で自己表現をしない女性だった。私たちは奇妙な3人であった。」と表現している。そして、理由は分からないが、マーウェデルが3人の要求に合わせるのには難しいのではないかと考えたと言う。

初日の講義は2時に始まった。ウィギンらは子どもが降園後、昼食を摂り、2時からの講義を迎えたのである。講義は何とマーウェデルが講義用ノートを置き忘れ、それらを見つけるために本が入った3つの箱を開け、中身を取り出すというハプニングから始まった。彼女の話しはそのために少々動揺して取り留めのない所もあったが、フレーベルの生涯と業績についての概略に興味深く、惹きつけるように話してくれた。そして、ウィギンはセベランスから既に借りた本で前もって学んでいたが、マーウェデルの人間の魅力、熱心さ、話し言葉がすべてを違ったように感じさせたと記している⁴³⁾。

ウィギンは、自分の最初の教員としての指導がマーウェデルから与えられたことに感謝している。マーウェデルの指導は、その英語力や体系性の欠如した話から、すべての生徒に満足を与えたわけではない。彼女は理想家、夢想家、預言者であり、その足はまるで地に着いていなかった。夢想家や預言家は、実用的なことには不向きである。しかし、ウィギンは夢想家、マーウェデルと親密になることで、想像力を揺り動かされ、崇高なことを追い求める心に火がつけられたのである。

特に、ウィギンがマーウェデルの指導から学び取ったのは、共感的に子どもを見ることであった。「マーウェデルが、私たちが一緒に指導していた子どもたちの可能性について語っている時や、もし、子どもたちが非常に幼い時から兵士のようにしつけられたり、『規格化される』よりも、自制的で、創造的に育てられていればといった、フレーベルが人類の未来に向けたビジョンを列挙している時、厳しい現実社会から一時的に逃げるのができた。……私たちは彼女の母親へのメッセージをもっとまとまりのあるものへと翻訳したり、60歳近い彼女ができる以上に子どもたちとの親密な関係を作ろうと努力することもあった。しかし、彼女はビジョンを持っており、それを私たちに与えてくれた⁴⁴⁾。」

ウィギンたちが、養成校冬期課程で学んだ科目は、手作業の確かな応用と研究、心理学研究、教育史、ペスタロッチ、ルソー、ヘルバルト・スペンサーといった教育者の研究、フレーベルの『母の歌と愛撫の歌』などであった。手作業の確かな応用と研究には、手作業に必要なたくさんの手本を作ることが含まれている。つまり、それは幼稚園の作業を子どもたちに実践できるという、生徒の能力を証明することでもあった。生徒たちは日々、4、5歳児だけでなく、本による指導が必要な6、7歳児も含めた子どもたちとの実践を重ねながら、ゲームやストーリー・テリングの講義を受けた。記述すべき主題があったり、論議し解答を探り出す理論問題もあった。昼間は子どもとの実践と講義に追われ、夕刻は翌日の準備に2時間もかける生活であったが、目新しく、興味引かれる仕事に、ウィギンは疲れなかったと言う⁴⁵⁾。

ところで、ウィギンはマーウェデルから音楽的才能を買われ、音楽教師のアシスタントとして月10ドルの給与が与えられていた。こうした経済的自立が、彼女の生活に余裕を与え、実践や週4回の講義に追われていても、卒業式までの日々を満ち足りたものにした。

さて、ウィギンや生徒たちにとって、記念すべき卒業式が、とんでもないハプニングに見舞われた。マーウェデルやウィギンらは、幼稚園の理論を社会に広めるために、子どもたちを式から除くことはできないと考えていた。卒業式当日、保護者、教師、興味を持った人々が溢れる中、2つの部屋は混沌とした空気で包まれていた。生徒の一人ホイットが扁桃腺炎で倒れ、スチュワートは恐れでその場所から動けなくなったのである。さらに悪いことに、マーウェデルの式服がクリーニング屋から戻らず、セベランス氏がそれを探しに行っている間、セベランス夫人が待っている聴衆にフレーベルの教育論を魅力的に説明することなどできない。ウィギンは時間を稼ぎ、空気を一新する役目を果たす羽目に追い込まれた。以下は、ウィギンとエドガーのやりとりの概略である⁴⁶⁾。

エドガー以外に、こうした成り行きを助けられる者はいない。ウィギンは子どもたちの入場行進で時間を稼ぎ、聴衆の注意を引き付けることで、混沌とした空気を一掃しようとした。エドガーの中断ない暗示や活動の流れは、ドラムを叩き続ける行為以外には転用できない。しかし、行進のためにドラムを叩き続けるということにエドガーは激しく抵抗した。エドガー以外の子どもが彼に変わって先頭に立てば、彼はきっと耐えられない。そこで、ウィギンは一計を案ずることにした。嫌がるエドガーの帽子を掴み上げ、部屋に飾ってあるペス

タロッチの胸像に被せると、棚からドラムを持ち出し、弱いステップを踏み、楽器を軽く叩きながら、「私が自分であなたがたを先導します。」とエドガーに言った。効果は十分であった。エドガーはペスタロッチの頭から帽子をもぎ取り、ドラムを持ったかと思うと、将軍のような威厳を漂わせながら、私たちが集まっていた小さな教室の扉を開け、子どもたちを引き連れ、聴衆の待つ接見室へと入って行った。

このやりとりから、入学当初、ウィギンが求め続けたエドガーの教育方法は解明されたと言って過言ではない。まず第1に、ウィギンは、エドガーの間断ない暗示や活動の流れはドラムを叩き続ける行為以外に転用できないと判断した。彼の注目され続けたいという思いはドラムを叩き続けることによって達成される。しかし、彼はそれを嫌がり、引き受けようとしなかった。そこで、ウィギンが次に取った行為は、自分が先頭になって皆を導くと宣言し、誰にも先んじられたくないという彼の思いを刺激することであった。この2つの方法によって、エドガーは、ロサンゼルスにフレーベルの教育方法を導入したモデルと聴衆に見なされるほどに、その仕事を完璧にやり遂げたのである。ウィギンはエドガーに幼稚園の仕事を与えることで、エドガーをして遺憾なく、その力を発揮させた。ここにマーウェデルの共感的保育の奥義がある。

おわりに

エマ・マーウェデルは、ピーボディの説得に応じて、アメリカに移住し、サンフランシスコ幼稚園協会 (San Francisco Kindergarten Society) の設立に寄与した人物として知られている。彼女が求めた幼稚園での保育実践や幼稚園教員養成の実際がいかに他のドイツ人幼稚園指導者たちと異なっていたのかを、スウィフトのマーウェデル伝やウィギンの自伝から明らかにしてきた。

マーウェデルの保育実践及び教員養成は、他のドイツ人幼稚園指導者とは対照的に、フレーベルの著書や恩物・作業ではなく、子どもや養成校生徒への深い共感から出発している点に特徴がある。マーウェデルはウィギンらにエドガーを観察・記録させ、彼の持つ才能を大人の枠組みから評価し歪めるのではなく、幼稚園で与えられるいかなる仕事も、それを発展・開花させるのかを考えさせていく。そこには、1つの定まった正解はない。マーウェデルは、共感的保育観・子ども観に立脚した保育とは、子どもが1つ1つ試しながら、学び取っていく過程をその場に居て観察・記録し、共に学ぶことであると、生徒たちに身をもって教えた。そしてウィギンは、マーウェデルのビジョンである共感的保育観・子ども観を学び、体得することで、人生で初めて自分がやるべき明確な手がかりを掴んだという興奮を感じたのである。

発達障害を持つ子どもたちへの保育・教育が模索されるわが国の幼稚園教員の専門性としての共感とは、子どもの活動・発達要求を見極め、それを適切に伸ばすための環境と方法を洞察・判断する力である。それは子どもから学び取るものであり、競争原理や効率化の原理を強化し、パターン化して教え込むものではない。競争原理やパターン化した体系的指導の強化は、そうした力を枯渇させる原因となる。今一度、原点に戻って、何をもって幼児期の保育・教育の質的向上と考えるのか、根本から問い直す必要がある。

注

- 1) 文部科学省「幼稚園における学校評価ガイドライン」2008年3月24日、2頁。
- 2) 佐伯胖編『共感一育ち合う保育のなかでー』ミネルヴァ書房、2007年、ii・iv頁。
- 3) 拙稿「無償幼稚園における子どもの生活形態と母親教育ーケート・D・ウィギンの実践を通してー」『鳴門教育大学研究紀要』第22巻、2007年、86-95頁を参照。
- 4) Shapiro, M.S, *Child's Garden: The Kindergarten Movement from Froebel to Dewey*, The Pennsylvania State University Press, 1983, pp.30-31. ここでは、開設した年が1855年と記されているが、田中敏隆・中谷彪編訳『シュルツ伝記：アメリカ最初の幼稚園』1981年、学苑社では1856年となっている。
- 5) Snyder, A., *Dauntless Women in Childhood Education 1856-1931*, Association for Childhood Education International, 1972, p.31.
- 6) Peabody, E.P., "Development of the Kindergarten," in H. Barnard (ed.), *Papers on Froebel's Kindergarten, with Suggestions on Principles and Methods of Child Culture in Different Countries*, Office of Barnard's American Journal of Education, 1881, p.x.

- 7) Swift, F. H., "Emma Marwedel, 1818-1893: Pioneer of the Kindergarten in California," *University of California Publications in Education*, Vol.6, No.3, 1931, p.139.
- 8) *ibid.*, p.144.
- 9) *ibid.*, p.179.
- 10) 川越修「一九世紀ドイツにおける女性論」川越修・姫岡とし子・原田一美・若原憲和編著『近代を生きる女たち—一九世紀ドイツ社会史を読む—』未来社, 1990年, 48-57頁。姫岡とし子『近代ドイツの母性主義フェミニズム』勁草書房, 1993年, 22-42頁。
- 11) 姫岡, 同上書, 25頁。
- 12) Swift, *op.cit.*, p.140.
- 13) *ibid.*, p.145・148.
- 14) 姫岡とし子「一九世紀前半の女たち」川越他, 前掲書, 97頁。
- 15) 姫岡, 前掲書, 27頁。
- 16) Swift, *op.cit.*, p.151.
- 17) *ibid.*, p.149. スィフトの見解は一般的に受け入れられており, ベッティの著作においても, マーウェデルを「1818年, ドイツのミュンデンに生まれ, フレーベルの第2の妻であるルイーゼ・フレーベルによって訓練された」と紹介している。Beatty, B., *Preschool Education in America: The Culture of Young Children from the Colonial Era to the Present*, Yale University Press, 1995, p.92.
- 18) *ibid.*, p.148-152.
- 19) *ibid.*, p.152-153.
- 20) *ibid.*, p.154-155.
- 21) U. S. Bureau of Education, *Report of the Commissioner of Education for the Year, 1874*, Government Printing Office, 1875, pp.578-579.
- 22) Vandewalker, N.C., *The Kindergarten in American Education*, The Macmillan Co.1908, p.166.
- 23) Shapiro, *op.cit.*, pp.31-32・36. 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部, 1999年, 387-389頁。
- 24) Peabody, *op.cit.*, p.x-xi. Shapiro, *op.cit.*, p.32. 岩崎, 388頁。
- 25) Shapiro, *op.cit.*, pp.33-34. 岩崎, 334-346頁。
- 26) *ibid.*, pp.34-36.
- 27) 岩崎, 前掲書, 388頁。Peabody, *op.cit.*, p.xi. シャピロの著書では, クリーゲ母娘がニューヨークの幼稚園教員養成校, 附設の幼稚園, 初等学校に加わったのは, 1873年10月になっている (Shapiro, *ibid.*, p.38.)。
- 28) Shapiro, *op.cit.*, pp.36-40・p.53.
- 29) *ibid.*, p.39. 常美育男『最初の家事学書・海老名晋訳『学事要法』の訳者海老名晋と訳書『家事要法』(明治十四年文部省刊)ならびに, 原書者「カザリン・ビーチャー」Catherine Beecherと原典「プリンシプル・ドメスティック・サイエンス」Principle of Domestic Scienceについての調査』1988年, 54-63頁。奴隷解放に大きな力となった『アンクル・トムの小屋』の作家, ハリエット・ビーチャー・ストウ (Beecher-Stowe, H.) は実妹である。
- 30) U. S. Bureau of Education, *op.cit.*, pp.574-575.
- 31) Peabody, *op.cit.*, p.xi. Vandewalker, *op.cit.*, p.18. シャピロの著書では, バリットはクラウス・ベルテの弟子となっている (Shapiro, *op.cit.*, p.75)。
- 32) ウィギンの自伝では, 1877年になっている。
- 33) Wiggin, K.D., *My Garden of Memory: An Autobiography*, Houghton Mufflin Co., 1923, pp.92-93.
- 34) *ibid.*, pp.93-94.
- 35) *ibid.*, pp.94-95.
- 36) *ibid.*, pp.96-97.
- 37) *ibid.*, p.95.
- 38) *ibid.*, p.95.
- 39) *ibid.*, pp.95-96. ウィギンは『子どもたちの権利』の中で, 1人の子どもがクラスの取り決めに破ったのにもかかわらず, 罰として何も仕事を与えないことに疑義を唱える訪問者と幼稚園教員のやりとりを次のよう

に紹介している。「女性訪問者は、『それは奇妙な考えです。私の時代では、仕事は罰として私たちに与えられました。それは優れた考えだと思っています。』と言った。それに対して、幼稚園教員は微笑みながら、『私たちは別のやり方で罰を見えています。仕事は世界中で、本当に偉大な万能薬であり、最も優れたものだとはあなたは理解しておられます。私たちは常に子どもたちを勤勉で有用な作業を愛する者に育てたいと努めています。そこで、私たちは仕事を報酬として与え、それを取り上げることを罰とするのです。』』と答えた。(Wiggin, K. D., *Children's Rights: A Book of Nursery Logic*, Houghton, Mifflin and Co., 1892, p.215.)

40) *ibid.*, p.97.

41) Marwedel, E. ,“Kindergarten Work in California,” in Barnard (ed.), *op.cit.*, p.665.

42) Wiggin,(above no.33), p.97.

43) *ibid.*, p.98.

44) *ibid.*, pp.98–99.

45) *ibid.*, p.100.

46) *ibid.*, pp.103–104.

The Sympathy as for the Specialization of the Kindergarten Teacher

— Through Emma Marwedel's Practice in the Kindergarten and the Training School —

HASHIKAWA Kimiyo

The purpose of this study is to discuss the sympathy as for the specialization of kindergarten teacher, through Emma Marwedel's practice in the kindergarten and the training school.

Emma Marwedel, a pupil of Froebel's widow, was the pioneer kindergarten leader in California. Marwedel opened the first kindergarten and kindergarten training school in Los Angeles about 1872. It is obvious in the student of Marwedel Kate Douglas Wiggin's autobiography that she has taken thoroughly to heart Marwedel's teaching that modification in materials and methods must be made but Froebel's principles were sound even to the point of implementation. Wiggin has been in an incredible state of excitement, for she has felt that the group of young children touched her new springs of action and awakened her new powers. Marwedel has ordered students to take the note of children and wanted to cultivate their observation. Wiggin has seen, Marwedel has been trying to train the children to a love of industry and helpful occupation; so she has given work as a reward, and took it away as a punishment.

The core of Marwedel's practice in the kindergarten and training school is not Froebel's writing, gifts and occupation, but arousing sympathy to the children from students. The sympathy as for the specialization of kindergarten teacher is to see the children's needs of activities and development, and have an insight into giving the most apropos work to their circumstance. Marwedel is more of a student of the scientific aspects of child life than most of the American kindergarten leaders.

By historically tracing the above-mentioned Emma Marwedel's practice in the kindergarten and training school, we would have a better understanding the sympathy as for the specialization of the kindergarten teacher.